

フランスをついた王

——シャルル7世年代記——



0. 国民国家フランスの誕生

「フランスは、いつからフランスになったのか？」

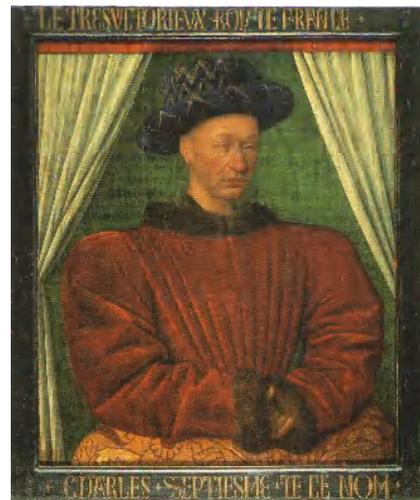
これは、なかなか難しい問題である。

『フランス史』あるいは『フランスの歴史』といった通史の多くが、まず「先史時代のフランス」から始まるのだから、答えはそれでよいはずだが、実はそう簡単にはかたづかない。その冒頭に記述されるクロマニヨン人からケルト人にいたる人々は、たしかに今日フランスと呼ばれる土地のどこかに暮らし、足跡を残してはいるのだが、彼らの暮らしした「やがてフランスとなるはずの土地」に一体性を感じることはなかったに違いない。

それでは「フランスにすむ人々が、言葉や習慣を共有し、地域と文化の一体性を感じ始めたのはいつか」と言えば、それは紀元前58年にあのユリウス・カエサルがアルプスを越えて軍を進め、ガリア遠征を行った時に始まると言ってよいのではないだろうか。この遠征の結果、ローマは、それまでの地中海沿岸一帯の植民地ナルボネンシスに加えて、ピレネー山脈の東からライン川の西にいたる広大な領域を手に入れ、今日のフランスよりやや広い地域を支配するにいたった。そしてカエサルの死後に帝国が成立すると、着々と「ローマ化」を進め、都市を建設し、道をつくり、言葉や制度を整え、ぶどうや小麦や雑穀といった農業生産を基礎とするライフスタイルを北の果てまで押し広げていった。

こうしてローマ化した「フランス」が、ローマの支配から独立し、独自の国家的なアイデンティティを確立するのは、周知の通り、クロヴィス1世(466-511)が、フランク族を統一してメロヴィング朝フランク王国を立てた時であろう。

知略にとんだ彼は、486年にガリア北部を支配していたローマ系軍閥のシアグリウスをソワソンの戦いで破ると、493年にブルグンド王国の王女クロティルダと結婚し、496年に



はキリスト教に改宗して、ローマ人の築きあげた文化的な一体性を継承する。さらに支配地を広げながら、508年にパリに都を移し、511年に死去すると、パリ郊外のサン＝ドニ大聖堂に埋葬される最初の王となった。

しかしクロヴィス1世の死後、メロヴィング朝フランク王国は4つに分裂し、さらに分裂と抗争を繰り返して滅び、篡奪者ピピンは教皇ステファヌス3世にラヴェンナなどを寄進してカロリング朝を立てる。その子シャルルがローマで戴冠し、800年に西ローマ帝国を復興させたことは、よく知られている。しかしアーヘンに生まれ「カール大帝」とも「シャルルマーニュ」とも呼ばれるこの偉大な王は、たちまちのうちに現在のドイツ、フランス、イタリアにまたがる大帝國を打ち立ててしまったので、とてもフランス一国の王と呼ぶわけにはいかない。

フランスが、ふたたびフランスとしての姿を現すのは、シャルルの3人の孫たちが争ったあげくに結ばれたヴェルダン条約(843年)でシャルル2世が現在のフランスより少しせまい西フランク王国を継承し、さらに長兄ロタールの死後の混乱について次兄ルードヴィッヒと870年にメルセン条約を結び、国土を分け合った時というべきである。このフランク王国の分裂を契機に、現在のフランス、イタリア、ドイツという3つの国の領域がほぼ固まり、今日のフランス語につづく「古フランス語」も徐々に普及してゆく。

しかし問題は、この時期のフランスに住む人々が「フランス人」というアイデンティティをもたず、あくまでもカロリング朝「西フランク」の一員として振舞っていたことである。シャルル2世自身も、875年に甥の西ローマ皇帝ルードヴィッヒ2世が死ぬと、後を襲ってただちにイタリアに侵攻し皇帝カール2世として即位する。

それでは、フランスが初めてフランス人の王を戴き、「フランス王国」となったのは、いつか。

それは、カロリング朝が断絶し987年に西フランク王ロベール1世の孫であったパリ伯ユーグ・カペーがフランス王に選出され、カペー朝が成立した時である。このユーグ・カペーの男系の血筋は、この後サリカ法典に守られて、ヴァロア朝、ブルボン朝、そしてフランス革命を経て、オルレアン朝で終焉を迎えるまで、実に1848年まで脈々と受け継がれることとなる。

しかし、初代ユーグ・カペーが王位についた時、彼は一介のパリ伯にすぎず、カロリング朝の血筋の継承を主張するロレーヌ大公シャルルをはじめとする有力諸侯の間に埋没しかねない存在だった。ユーグを支えたのは、ランス大司

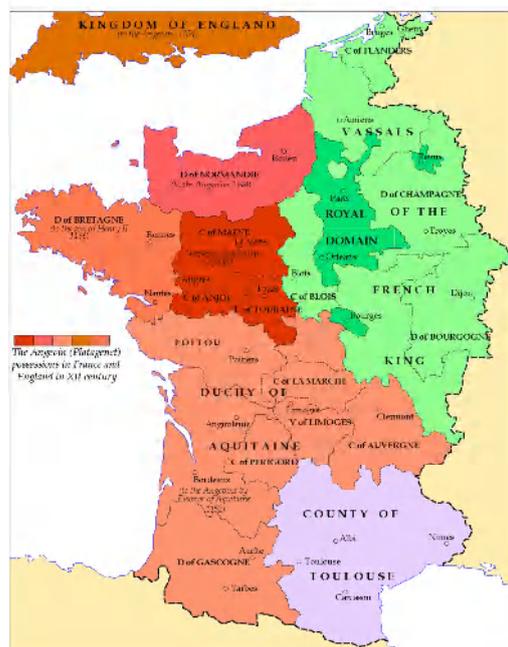


図 01：茶色がアンジュー家の所領、緑色がフランス王家の支配地。王の直轄地は、濃い緑色の部分に限られている。

教アダルベロンをはじめとする、わずかな教会勢力にすぎなかった。

ユーグに続くカペー朝の王たちは、この貧しい支配地を堅持し、武力と政略によって、着々と拡大してゆくが、1152年、ルイ7世が妻アリエノールと離婚した時に最大のピンチを迎える。アリエノールは離婚後わずか6週間で大領主ノルマンディ公アンリと再婚するが、2年後の1154年にそのアンリがイングランド王ヘンリー2世として即位するという大事件が勃発する。地図02は、当時のフランス勢力図であるが、アリエノールとアンリの支配地は、当時のフランスの3分の2近くを占めている。イングランド王ヘンリー2世がフランスの最大領主となったのである。(図01)

ルイの後を継いだカペー朝の王たちは、たしかに有能で、この失地の回復を着実に進めたが、1328年にカペー朝の最後の王シャルル4世が直系男子の後継者を残さずにこの世を去り、甥にあたるフィリップ6世が即位しヴァロア朝をたてると、イングランド王エドワード3世が王位の継承を主張し、やがて百年戦争に発展する。

エドワードは、1346年7月にノルマンディに上陸し、8月26日のクレシーの戦いにおいて決定的な勝利をおさめる。そしてさらに1356年9月、ブラック・プリンスとあだ名されるエドワード3世の長子エドワードはポワティエの戦いで圧倒的な勝利をおさめ、フランス国王ジャン2世を捕虜とする。

これら2つの戦いで数の上で優位を誇るフランスが敗れたのは、イングランド軍の擁する長弓部隊のまえに為すすべを知らなかったという戦術的な誤りもあるが、それ以上に、フランス方が国家としての統一を欠き、大領主や騎士たちの軍隊が寄せあつめの「烏合の衆」にすぎなかったのが大きな原因である。

ジャン2世の長子シャルル5世は、この問題に気づき国家の建て直しをはかり、イングランド軍をあと一步のところまで追い詰めたが、禍根を残したまま1380年に没した。

そして1412年8月、イングランド王ヘンリー4世はノルマンディに上陸する。賢明なシャルル5世の死後、ふたたび国家としての統一を失っていたフランスは、1415年10月に行われたアザンクールの戦いで、クレシー、ポワティエと同じ誤りを重ねて大敗し、三度後退を余儀なくされ、5年後の1420年にはイングランドとの間にトロワ条約を結び、イングランド王ヘンリー5世をフランス王シャルル6世の後継者とするところまで追い込まれた。

国家としてのフランスは、ここに存亡の危機を迎えることとなる。

この危機の折り返し地点となったのが、1429年5月のオルレアン of 戦いである。

この時、フランス軍の先頭にたったジャンヌ・ダルクは、まさに奇跡をもたらしたといっただろう。彼女は、その時まで烏合の衆の寄り合い所帯にすぎなかったフランス軍を、彼女が「やさしい王太子」と呼んだシャルルの率いるフランスの国軍として纏め上げたのである。

ジャンヌの生まれたロレーヌ地方のドンレミという村は、今でこそフランスだが、当時は、フランス王国から独立したロレーヌ公領に属していた。その彼女が、神の声を聞き、

王太子シャルルをフランス国王としてランスで戴冠させるために村を出たのである。

ジャンヌが登場する 15 世紀初頭までのフランス人の間には、「自分がフランス人である」という自覚を持つ人は少なかった。たとえば、イングランド支配の長かったボルドー周辺の人たちには、およそフランスなどはどうでもよかった。それが、1453 年 10 月の激しい戦いの後にイングランド軍から解放されると、次第にフランスのうちに一体化されていく。今日、ボルドー・ワインのないフランスなど、だれがイメージできるだろうか？

1429 年 5 月、ロレーヌの片田舎からやってきた少女に率いられた烏合の衆は、心をあわせて戦い、オルレアンを解放し、「フランス人の軍隊」に新しい可能性を開いた。ジャンヌは、フランスの国民的統合の最初の象徴としての役割を果たし、ジャンヌに助けられて王となったシャルルは、ジャンヌの播いた種を育てて、国民国家フランスの礎を築いた。

シャルル 7 世が、その後 30 年あまりにわたって、知略と政略を駆使して築き上げた中央集権的な官僚や軍隊や財政のシステムは、いまだプリミティブな側面を残すが、この後ルイ 14 世の絶対王政とフランス革命を経て、現在のフランスに受け継がれる。息子のルイ 11 世と孫のシャルル 8 世が、彼の路線を受け継いで、ブルゴーニュ公国とプロヴァンス伯領をフランスに組み込むと、その後、フランスの国境には大きな変化が生ずることがなくなった。

「フランスは、いつからフランスになったのか？」という問に答えることは難しいが、「フランスは、いつから国民国家となったか？」と問われれば、「それはシャルル 7 世の時代からである」と答えても、大きな間違いではない。

以上が<はじめに>の部分です。

つぎに全体の構成を紹介します。

目次

0. 国民国家フランスの誕生

1. 狂気の父と不実な母

1-1 みにくい王子の誕生

1-2 三代目のシャルル

1-3 父の病い

1-4 不実な母と王弟ルイの戦略

2. 「よき母」ヨランドと「金持ちおじさん」のジャン

2-1 「よき母」ヨランド・ダラゴン

2-2 金持ちおじさんジャンの遺産

2-3 ブルゴーニュ侯の暗殺とトロワ条約

3. オルレアンの乙女と青髭

- 3-1 寵臣たちとの戦い
- 3-2 オルレアンの乙女
- 3-3 ジル・ド・レの戦い

4. フランス王シャルル七世の権力と政治

- 4-1 パリへの遠い道のり
- 4-2 野盗たちと軍制の改革

5. ジャック・クールとノルマンディの解放

- 5-1 ジャック・クール
- 5-2 ノルマンディ解放とジャックの逮捕

6. エピローグ

- 6-1 「蜘蛛の王子」ルイの罾
- 6-2 シャルル七世の死